

ジャズを聴いてみたい、さてどうしましょうか？

先日、Amazon 経由で注文した油井正一氏の『ジャズ ベスト・レコード・コレクション』が届きました。勿論中古、古本です。

油井さんといえば、私は 10 代の頃、NHK-FM で油井さんがジャズを紹介する番組を放送していて、少々だみ声の「それではお送りしましょう。レスター・ヤングとテディ・ウィルソンの（何とかかんとか）」がいまだに記憶に残っています。

しかしその当時はその番組を熱心に聴くということは全くありませんでした。どうも何か違和感があったからです。

この本が届いて、パラパラと紹介されているアルバムを眺めてみると、改めてあの当時の違和感がよみがえってきました。

散漫というか、まんべんなくというか、焦点が定まらないというか・・・この本、何しろ紹介されているアルバムは 597 枚もあるのです。

これからジャズを聴いてみようかという場合、597 枚を目の前にすると途方にくれてしまうことは間違いありません。

何処から入れればいいのか、何から聴けばいいのか、その具体的な方法、現実的な手段はこの本では一切呈示されていません。

そこで私自身の経験（試行錯誤・右往左往）を踏まえて「一体どうすればいいのか？」について考えてみたいと思った次第です。

なお念の為に申し上げますと、この本で油井さんが書かれている考え方は決して間違っていないと思います。それは経験を積んだ立場からするとよく分かります。

この本は使い方さえ分かれば本当に役立つことは間違いありません。そういう意味で、上級者向けの本としてはいいのですが、このままではとても初心者向けとは言えません。

それでは、まず考えるにあたっての前提条件です：

- 1 日本人は世界でも稀な混血人種です。つまり「親子で違い、兄弟で違う」、一人一人が異なります。

この事がジャズを聴く場合、何を意味するかというと、たとえ入口が同じでも百人いれば百通りの聴き方になってしまうということです。自分にとってどのような聴き方がよいかは、それぞれが独自に発見するしかないということになります。

2 大方の日本人にとって好ましい音楽とは何か？

それは歌モノです。しかもメロディーが先にあるのではなく歌詞が先行しています。

これに加えて踊り、つまり「歌謡」が大勢に支持されています。

「ジャズ聴き」は日本人の中ではマイナーな存在だということになります。

次は考える際の「目標」です。

- 1 ジャズをどこからどう聴けばよいのか、具体的な手順とその理由を示すこと。
- 2 一人一人がそれぞれの聴き方を発見したとしても、上記の入口の部分が無駄にならないこと。

では具体的にどのような方法でこの問題を検討すればよいかについて考えてみます。

ここでは「新旧対決」というか、「故油井正一氏の考え方 vs 故中山康樹氏の考え方」という図式をベースにして、私なりの考え方（折衷案ということではありません）を述べてゆくことにしたいと思います。

まず両氏の考え方がよく出ているそれぞれの著作を少し詳しくご紹介します。

『ジャズ ベスト・レコード・コレクション』油井正一 新潮文庫 1986年

ここでは1921年から1985年の64年間で597枚のアルバムが紹介されています。

なお油井さんの場合はCDではなくアナログレコードが基本です。

また、本の冒頭に次のような記述があります。

「対象をしぼるのがベター

ジャズは集団の音楽であると同時に個人の音楽である。個性が強ければ強いほどきく方にとっては、かなり好き嫌いが出る。他人がどんなに誉めようとも、嫌いなミュージシャンのレコードは買う必要がない。」

「本書の意図

本書に挙げたレコードは、僕自身はかなり独断と偏見を以ってえらび出したものである。この本の通りに集めてもあまりあなたにとって価値あるコレクションにならないだろうことは、今述べてきたことでおわかりであろう。

しかしあなたがめぐりあうべきアーティストは必ずこの本のどこかに挙げられているはずで、そこからあなたの重点的なコレクションづくりがはじめられることを僕はねがうのである。」

さらに「あとがき」には次のような記述があります。

「世間では僕をジャズ評論家というが、自分では啓蒙運動に終始する研究家のつもりでいる。(中略)

僕がこの本の対象にえらんだ読者は、そうした理解者でなく、これからジャズやポピュ

ラー音楽に関心を持つようとしているより若い層である。」

このような具合で、この本の意図は至極真っ当なものですし、①アルバムの紹介は年代順になっている、②アルバムの元レーベルが明記されている点は評価されてよいと思います。

さて、もう一方の中山氏の著作も少し内容をご紹介します。

『超ジャズ入門』中山康樹 集英社 2001年

中山氏はまず次のように述べています。

「とにかくジャズの CD を買ってください。二枚、です。バーゲン品でもなんでもいいです。贅沢はいりません。」(中山さんは油井さんとは違い CD がベースです)

しかしこう書きながらも「第4章 超 CD コレクション術」において「必聴 マイルス・デイヴィスの 50 枚」「必聴 ブルーノートの 50 枚」という風に具体的な目標を設定しています。つまり上記の「二枚」は捨石というわけです。

また中山氏はジャズ評論界のオーソリティに対してやや過激ともいえる反感を文章化していますが、それはどうもこの著書をアピールするための演出のようにも思えます。

お二人の著書を冷静に解説してみると、どうも両氏がジャズ入門者に本当に勧めたいアルバムについてはそれ程の違いはないのではないかと考えられます。

その根拠ですが、まずは油井さんの方です。

1954年から1965年の11年間で紹介されているアルバム数はNo.115からNo.338の223枚(年間平均20.2枚)となります。

特に1959年だけとってみると22枚です(ちなみに1960年も22枚)。

前述したように、本書では1921年から1985年までの64年間で全597枚のアルバムが紹介されているわけです。

つまり上記の11年間で紹介されているアルバムの数は他の年に比べて多いということになります。

もし年間22枚のペースで64年間ということになると、紹介されるべきアルバム数は何と1408枚になってしまいます。

この11年間にかなり重点がおかれていると言ってよいのではないのでしょうか。

一方の中山氏ですが、マイルス・デイヴィスの50枚、ブルーノートの50枚ということですが、マイルスの場合は1966年以降の作品も含まれていますが、ブルーノートの場合はほぼこの11年間とオーバーラップします。

要するに両氏が重点を置いている時期・時代にそれ程の違いはないということになります。

こうしたことを踏まえた上で、私なりの考え方を申し上げますと：

やはりまずは“モダン・ジャズ”（時期はこの11年間）から入ることがよろしい、ということですが。

何故かと言うと、ジャズの世界でも「その時代のサウンド・スタイル」とでもいうものがあるからです。マイルスを聴いていると、1953年、'54年を境に、それ以前とそれ以後では演奏（サウンド）が違うことが分かります。

しかしマイルス一人が変わったわけではなくて、共演者も含めたジャズ界全体が変わっていったのだと思われまます。

ジャズの魅力は黒人の音楽と白人の音楽が融合したところにあると言われますが、私の解釈では白人の音楽語（＝メロディー語）と黒人の音楽語（＝リズム語）が会って音楽語がより複雑で豊かになったのだということになります。

その新しい音楽語が洗練された時期がいわゆる「モダン・ジャズ」の時代だと思います。（その後、ジャズはどんどん変容していってしまいますが）

とはいえ、223枚から数枚を選ぶなどという事は大変ですので、この時期の真ん中あたり、例えば1959年（1960年でも構いません）の22枚の中から数枚を選べばよいと思います。この時期の名盤・名演奏というものは購入しても決して無駄にはなりません。

また油井さんはレコード派ですが、レコードでなくともCDでもよいと思います。

ただしCDといってもいろいろです。幸い油井さんの本ではオリジナル盤のレーベルが紹介されていますので、出来ればそのレーベルからの再発盤（従って輸入盤）を購入するといいいでしょう。例えばオリジナルが米国コロンビア（CBSの子会社）であればColumbia Legacyというシリーズ。

昔と違い、通販のAmazonなどで手軽に購入出来ますし、購入の際にレーベルを確認する事も出来ます。

なお、1960年前後にモノラル録音からステレオ録音へという移行が始まります。その点に留意されるといいでしょう。

以上はあくまで「入口」の話です。入口の向こうは人それぞれ、どのような道筋を辿るかは自分で考えなくてはなりません。

（私の場合はマイルスが基本で、これと他のミュージシャンを対比させながら聴くというスタイルです）。

普通、ジャズ入門というと、特定のアルバムかミュージシャンを勧められるのですが、私の場合は特定の年代・年をお勧めします。ジャズの場合でも「当たり年」とでもいうものがあるからです。